
先輩と僕

送り狗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

先輩と僕

【Zコード】

N8171X

【作者名】

送り狗

【あらすじ】

天然でふわふわしている先輩と、先輩のことなら誰にも負けない僕の何気ない日常会話。時折出てくる先輩と僕以外人達との日常会話もまたほのぼのとしていたり、笑えたり、一話が1分もからず読めてしまう、ショートショートなお話です。

暇な僕（前書き）

女の子と2人つきりの部屋で僕は何をすればいいのだろう？ 可愛い先輩をからかうのか、空気に耐え切れずに助けを呼ぶのか。僕は逃げ出さない。

なぜなら……先輩をからかうのは僕一人で十分だから！

どこかの高校の、どこかの部室で、先輩と僕のなにげない会話が始まる。

4時35分。もつすぐ5時になる。今、僕はとても暇だった。どれくらい暇なのか例えるなら、校長先生の挨拶くらい暇だ。

（はあ……暇だ。何か面白いものはないかなー あつ先輩発見！）

クルッと首を動かし部室の中を見回すと、僕のすぐ近くだけど、見て近くも遠くもない距離に先輩がいた。

今日も先輩は、お決まりのように本を読んでいる。

「ねえ先輩、バナナって10回言ひてみてください」

「ん？ なんで？」

本を読んでいた先輩は、本から顔を上げると首を傾げている。

「いいから、きつと面白いですよ」

「そつかなー じゃあ、バナナバナナ バナナ。はい、言つた

よ

素直に言つてくれる先輩。可愛いです！

「先輩は？」

「バナナ！」

予想以上に可愛い先輩。「これはもうからかうしかない。

「わーい 先輩バナナー！」

「なつ！？」

僕にそう言われると、自分の言い間違えに気がついたのか、先輩は顔が真っ赤になり慌てだした。

「や、やめなさい！ わたしはこれでも君の先輩なのよっ

「えー 自分のことをバナナと言つてしまつ先輩には、どうにこも説得力がありませんね」

僕が返した言葉のほうが説得力があつたようで、先輩は押し黙つてしまつ。

（わつ、ちょっとやり過ぎてしまつたかな？）

「す、すいません。少し言葉がきつかつたかもしだせん」

僕は少し言ひすぎてしまつたと、先輩に謝つた。

「せ、先輩？」

しばらく経つても返事が来ない。僕が心配をしだしたころ、先輩が
よつやく喋ってくれた。

「わ……わたしは……バナナじゃない……もん……」

下を向いていた先輩はゆっくりと僕を見上げると、赤面した顔のま
ま僕にそう言った。先輩と一緒にいるといつも思っていたが、今日
はいつも増して思つてしまつた。

（先輩可愛い　つ！－！）

暇な僕（後書き）

一話完結のショートな話です。

感想など書いてくれると嬉しいです。

驚く先輩（前書き）

驚いた先輩と僕の話

僕と先輩しかいない部室。先輩はいつもどうり本を読み、僕は惰眠をむさぼる。そして過ごしていた僕は先輩の悲鳴で目が覚めた。

「ぬうおー!? どうどうしたんですか先輩ー!?」

「くつ黒いものがつ！？ わたしの足元を黒いものがつ！！」

「黒いもの？」動いて黒いもの？それって何？……「その名前を言わないでっ……！」……「

僕が首をかしげながらその名前を口に出そうとすると、先輩が必死になつて遮つてきた。

「黒いもの
例のあのヒトがあーーー！　なんとかしてよ君。男の
子でしょー！」

「！？」

今日の先輩は混乱していた。混乱した先輩はそのまま訳の分からな
いことを口にしだす。

「例のあのヒトがいたつていう事は、ここにまつと居るつていうわけで……部費でホイホイを100個くらい買わないとか、」

「せつ先輩！ そんなに置いたら足の踏み場もなくなりますよつ！ それに今居るのは一回です。それさえ退治すればいいじゃないですか！？」

「その名前を言わないでつ……」

「名前言つてしませんよー！？」

しかし、怯えている先輩もまた可愛いが、いつものように先輩が一番可愛い。

（先輩を怯えさせるなんて……。これは僕がゴキ……『言わないで……』……例のあのヒトを退治するしかない……）

「先輩は廊下に出ていてください。ここは僕が何とかしますんで」

「わつ分かつたあ……」

そう言つと、先輩は廊下に出ていく。扉が完全に閉まるのを確認すると僕は行動を開始する。

「先輩を怯えさせるヤツは僕が許さない。わて 覚悟するんだ
ね」

それから僕は、『いやあ、はあつ』と、例のあのヒトに苦戦し、勝利する。

「先輩、もう危険がなくなりました。安心して入ってきてください」

「え？？」

扉からチヨコンと顔を出した先輩は中を覗くと、そろそろと入ってくる。

「ほり見てください。ヤツはいなくなりましたよ」

僕は両手を広げて部室が安心なのを先輩に見せる。その様子を見て、ホツと一安心した先輩の目に何か黒いものが写つたらしい。

「えやああああ　！　！」

そうして本日一回目の、僕の戦争が始まった。

驚く先輩（後書き）

その後先輩は怯えてしまつて、3日ほど部室に寄り付かなくなつてしまつた。

えんぴつと僕（前書き）

えんぴつを語る僕と先輩のお話

えんぴつと僕

『カリカリカリカリカリ……カリカリカリ』

先輩と僕の2人しかいない部室で、えんぴつが紙の上を滑る音しか聞こえてこない。

今日の授業でたっぷりと出されたレポート相手に格闘していたとき、左手に持ったえんぴつを見て、僕は唐突に思った。

「先輩、えんぴつって使ったことがありますか？」

窓枠に寝そべってひなたぼっこをしていた先輩は、僕の突然の質問にのんびりとした口調で答えてくれる。

「バカにしないでよ君。わたしはこれでも小学校6年生まで使っていたんだから！」

「小学校6年生ですかあ」

「先輩つて、小学校6年生の頃から可愛かったんでしょうね。あーあ、小学6年生の先輩が見たいなー」

僕がそう言つてしまつたときにはもう遅く、先輩は熟れたトマトみたいに真っ赤になると、「そつそんなんことなんもんつ」と、大変可愛らしかった。

実際のところ、僕は狙つてやつ言つたのだけど。

「先輩。話は戻りますが、僕は今でもこいつてえんぴつを使つているわけですが、なぜだと思いますか?」

まだ顔が真っ赤のままの先輩に、僕は尋ねる。

「うえ? えつえーと……わからなーいよ」

「そうですか……」

僕は先輩に分からないと言われたことが意外とショックだった。なんだうう~。この胸がズキズキする痛みは?

「まつまあ氣を取り直して続きですが、僕はえんぴつが一番使いやすこと思つてゐるんですよ」

「自分で削り、お好みの使いやすさにする事も出来る便利さ。芯の濃さや太さにも多様なバリエーションがあり、どんな場面でも活躍してくれること間違いなし!」

「そして極めつけは、小さくなつたえんぴつの愛らしさ。小さくなつてくると、そのえんぴつにも愛着が湧いてきますし、なんたつてキヤップをつければ最後まで使えます!」

「まあ本当に小さくなつてしまつたえんぴつは、捨ててしまつです

が……」

「そして 捨てるときに物語が発生するー 今まで使ってきたえんぴつを手放してしまつといつ罪悪感。しかし、新しくえんぴつを使つてしまいたいといつ好奇心。なんてえんぴつは罪な存在なんでしょうーー」

「で、僕がえんぴつのことについて何を言いたいかと聞ついですが……えつあれつ先輩？ 先輩！？」

先輩は、僕が語るえんぴつ愛についていけずに、脱落したよつじた。

えんぴつと僕（後書き）
(あ書き)

せんぱ

いっ！！ カムバアアア

クッ！！！

ねじへりあじきわいせき（前輪わ）

ねじへりあじきわいせき（前輪わ）

「……おじしゃまんじゅうがしたいなあー」

僕は部屋でマンガを読んでいたとき、先輩が何の前触れもなくやつて言つていた。

そんなわけで、思いつきつ不意をつかれた僕は、「はこつーっ」と、素で返してしまつた。

「なんて声を出しちこるの君。おじしゃまんじゅうだよ、おじしゃまんじゅうー わつと樂しこせんただよ」

「あーちよつと待つて下せご。おじしゃまんじゅうは分かれますし、樂しこのも分かつます。でも なんで今?」

「おじしゃまんじゅうをしたことがあるのー?」

「??? 何ですか先輩?」

先輩が何かを言つたようだが、早口でうまく聞き取れなかつた。

「えつ? いやあ……それはそのお……そつねん、畠を癒かしんでいたら、急にやつてみたくなつただけだよ?」

「いや先輩、今何か言いかけませんでしたか?」

誤魔化そうとする先輩に追求してみる。

「何も言つてないっ……」

「はいっそうですねっ！」

誤魔化されました。

しかし……！のよつてなにか必死に誤魔化そうとする先輩。

しかし先輩！ 僕は見ていました。先輩がさつきまで読んでいた本の内容が青春モノで、その中におしくらまんじゅうが出てくることをつ！

「安心してください先輩っ！ 僕はさつきまで先輩が読んでいた本の内容に、おしくらまんじゅうが出てくることなんか誰にも言いませんからっ！」

「ああっーー？」

先輩は顔を押さえながら、走つて出て行つてしましました。

おじいちゃんじゅつじ先輩（後輩を）

この後先輩を捜しに言つた僕は、先輩にポカポカと叩かれました。：

自販機と僕（前書き）

自販機について語る僕と先輩の話

僕と先輩がいつも部活をしてる部室には、自販機がある。

部屋の作りはどこの文化部の部室とも変わらない。特別な場所に部室があるわけでも、無理を言つて設置してもらつていいわけでもない。

でもなぜか、自販機が部室についている。

その自販機は今でも機能している。とこうか、一回一回は業者が来て補充までしている。ごくひつとも。

自販機の中身も、お汁粉などオーソドックスなものから、今流行の炭酸飲料まで各種取り揃え。非情に充実した自販機である。

その自販機の需要はあるか？　ない。

その自販機を使っているのは、先輩か僕か、隣や同じ校舎で部活をしている生徒だけである。まったくもつてお金の無駄使いだ。

でも、先輩と僕はかなり重宝しているので、大事に思つている。

一度先輩に聞いたことがある。なんで部室に自販機があるんですかつて。

先輩は、

「わからない」

と、言っていた。そして、その後に続くように、

「わたしも昔気になつて、一度先輩に聞いたことがあるんだけど、分からんんだって」

「わたしが聞いた先輩が言うには、その先輩も入学してすぐに先輩に聞いたらしいんだけど、分からないつて。その先輩も、そのまた先輩も、そのまたまた先輩も知らないって聞いたよ」

「そしてわたしが思つてることなんだけど、この自販機にはすごい秘密が隠されていて、その秘密はきっと国家レベルで守られているんだよ…」

と、久しぶりに先輩が熱弁をふるつていた。僕は「そんなまさかあー」と言つていたが、もしそんな陰謀が隠されていたらどうしようと思つ悩んだこともあつたが、考へても仕方がないことに分類して思考を停止した。

しかし……僕が尊敬してやまない先輩は天然で、ちょっとふわふわしてみていて危ないのだが、勘ばつかりはものすごく良く、本当に心配している。

まあ今日は独り言をべらべらと喋つていたが、何が言いたかったのかといつと、先輩は天然でふわふわしていて勘が良いということだ。

自販機と僕（後書き）

ちなみに僕と先輩がいる部室は、倒れてくる本棚で自販機が隠れているので、使用には注意が必要である

購買部戦争と先輩（前書き）

購買部戦争に挑む僕と先輩の話

昼休み 朝、お昼ご飯を作り忘れてきた僕は購買部に来ていた。

聞いた話だけれど、うちの高校の購買部はお昼休みは大変混雑すると聞いている。僕は今まで購買部に足を運んだことが無かつたので、いい機会だ。その大変混雑するという購買部を見ようつじやないかっ！ なんて軽い気持ちできていた僕は、この高校の購買部での混雑するという言葉の意味の、スケールの違いに驚いた。

「うわあ なんだこれ！？」

そこはまさに戦争とでも表現したほうが当てはまる場所だった。

我さきに弁当や菓子パンに群がる学生たち。押し合いで一歩も動くことができない状況。何よりすごかつたのがその熱気だった。

「押すな押すなっ」

「おじつ君は俺が先に目をつけたんだ！」

「おじつ君は俺が先に目をつけたんだ！」

離れた場所に居る僕のところまで届く、その熱気と声。見ているだけで熱かった。

少し様子を見ていると、僕のクラスにいる熱血君こと皆みな 太陽がいた。太陽はこうこう熱い雰囲気が大好きなので、欠かさず昼飯争奪戦に参加しているのだろう。その証拠に、手際よく菓子パンを手に入れてはお金を払っている。

「おっ君じゃないか！ 珍しいなこんなところにいるなんて！」

さすが太陽というべきか、喋り方まで熱い。そんな太陽はチラッと購買部の方を見ると、珍しく戸惑つたような表情をしていた。

「君がいるってことは弁当を忘れたってことか？ 僕の菓子パンを分けてやるから教室にいかないか？」

「いやいや。それは太陽のお昼ご飯だし、僕が貰うのはなんか悪い。気にしないで、僕は自分で買つてくるから」

そういって僕は購買部のほうに向き直り、気がついた。

『先輩が売り子をしている』

僕はそれを見た瞬間、購買部に駆け出した。後ろから「あーあ」と言つ声が聞こえてきたが、気のせいだろう。

「どういー。」

どうやってか僕でも分からぬが、おしくらまんじゅう状態の最後

尾から僕はジャンプして最前列に降り立つ。周りの人は驚いている様子だつたが僕は気にしない。驚いている先輩に向かって僕はお金を払おうと口を開く。

「先輩を一人下さい！」

「100万円になります」

「……100回払いの、ローンで」

今日は部室にいないときの先輩を見れて、失ったものは大きいが、満足したことは伝えておく。

100万円はもちろん[冗談だし、僕は先輩のエプロン姿を見れて鼻血ものだったが、肝心なお昼ご飯を忘れていた。

泣く泣く帰ってきた僕は、太陽やクラスの子からお弁当を少しづつ分けてもらいました。

イタズラな先輩と窓と僕の話

いつもの部室。いつもの時間。今日も先輩と僕は部室で思い思いの時間を過ごしていた。

平和という言葉以外見つからぬくらいほのぼのとした空間。そんな空間で、僕は異彩を放っていた。

教室に置いてある机をいくつも並べ、ゴロゴロと寝転がっている。先輩と僕の2人しかいないため、目立つてはいるが気にならない。そんな絶賛怠惰中の僕に、先輩が声をかけてきた。

「寒いーっ！？ 君、窓を閉めてくれない？ 窓から入ってくる風が肌寒いから」

顔を上げて見れば、窓が開いており、まだ肌寒い季節だということも相まって、入ってくる風が冷たい。

「はい分かりました」

僕はそつと窓を閉める。

肌寒いこの季節、先輩に言われなくともいざれ気が付き窓を閉めたと思つ。しかし、

（先輩に言われて気が付くなんて末代までの恥だ……次からは先輩に言われる前に気が付かないと…）

そう決意して3分後、先輩から声をかけられた。

「暑い……君、窓開けてくれない？」なんか暑くなつてきちゃつたから

エアコン完備の我が家部室、
だ。ちなみに28度設定。
窓を閉めたついでにエアコンを入れたの

はい、と言つて窓を開ける僕。そして、エアコンの電源を消し、窓を少し開ける。

肌寒い風を感じながら数分後、先輩から窓を閉めてと言われる。そして数分後、窓を開けてと言われる。しばらくこんな事を繰り返すと……。

「なつなんだつてええ！？」

手振り身振りのオーバーリアクションで驚くが
た。そんな事とつぐに知つていましたよ、先輩！

先輩のお茶目なイタズラは逆に萌えると気が付かないと、どれだけ

の男が犠牲になるか分からぬ。

僕は目頭が熱くなるのを感じながら、肌寒い空に敬礼をした。

窓と僕（後書き）

この後、先輩に変なことを吹き込んだ人を探しに行くことにした
続く！

尋問と先輩（前書き）

尋問される先輩と僕

窓を閉め、カーテンを閉め、部屋の明かりを電球一個にした僕は、さらにカーテンの隙間から光が一切入らないようにガムテープを貼つていく。

そうして作り上げたほとんど闇の世界で、重々しく口を開き先輩に對して尋問を開始した。電球は僕と先輩の真上にあり、顔がわずかに見えるくらい。雰囲気は十分出ている。

さて、僕が尋問をする側、先輩が尋問をされる側。どうしてこのような流れになつたのかと言うと、人をからかう事なんてしないと思つていてる先輩に好からぬことを吹き込み、先輩を悪の道へと走らせたことが理由だ。

「さて……先輩、先輩にこんなことを吹き込んだ人物を教えて下さい。その人に天罰が下りますから」

僕は二二二二笑つて尋問を開始した。

「ええーと……君、顔が怖いよ？ それと私は誰にも唆されたりなんてしていないよ」

先輩は顔をこわばらせながらそう答えた。可哀想に先輩、そいつに言つなつて脅されているんですね。

「安心してください先輩っ！ 僕は先輩が脅されて言えないってことは分かっていますから、話してくれても先輩を裏切つたり見捨て

たりするようなことはありません！ 安心して話してください、さあっ！」

僕は早口言葉のよつに言いたいことを言つと、先輩を見る。そんな僕の言葉を聞いて先輩は困惑した様子で辺りを見渡し始め、やがて僕を見ると口を開いた。

「本当に駿されたわけじゃなーいって」

「先輩、いい加減僕に本当のこと話を話してくださいー。」

「いや、だからね」

「先輩つーー！」

「あーもうつーー。」

「ーー？」

先輩は勢いよく立ち上がると、扉に向かって全力ダッシュ。『ベー』と赤い舌を出して、どこかえ行つてしまつた。僕は突然の出来事にしばらく呆けていたが、何が起こったか理解すると急いで扉に向かい先輩と先輩を駆した人物を探すために走り出した。

尋問と先輩（後書き）

先輩探しを第一に、先輩を唆した人物を探しに校内を探索することになった。

調理部と僕（前書き）

調理部と僕の話

「せーんーぱーいー！…どこですかー？」 または先輩を唆した人
物、出てこないと痛い目に会つぞ！…」

僕はそんなことを少しも恥ずかしいと感じる事もなく、大声で叫びながら廊下を歩いていた。

僕のそんな様子を何事かと思い、教室から出てきた野次馬どもがいたが、そんなものの僕と先輩の固い絆の前にはタワシも同然だった。タワシがこちらを見ている。それが何だというのだろう。

しかし、思う。出でないと書いて素直に出でくる人間なんているのだろうか？ ましてや自分が危機に瀕してると書つのに、出でくる阿呆はいないと思う。

そうなりてみると困ったことがある。やがて、どうやって捜したらいいのだろう。しばらく考えていた僕は、あることを閃いた。

「そうだ！先輩の大好物はプリンじゃないか！？」

思い立つたが吉日。そんな明言があるくらい、行動するって大事じゃないかっ!? では、モノで釣るという作戦を決行!

僕は素早く調理室の場所を頭の中に思い浮かべると、ズンズンと足音を響かせるように歩き出した。先輩の大好物は手作りに限る。今まで作ってきた中で、どれが一番美味しいと言っていたのかを思い出して作ることにした。

調理室についた僕はまず、調理室の中を確認。

（ほう、調理部員が1人、2人、3人　　全員で7人か……多くないけど少なくも無いな）

そしてちゅうどいいタイミングな事に、今日はプリンを作るようだつた。

「では皆さん、材料の準備は出来ましたか？」

「はい先生！　僕の分の道具と材料がありません！」

「えつ！？　あつそれはすみません……ええーと、あなたのお名前はなんでしたつけ？」

「いやだなーもう先生、僕の名前は君ですよ？　忘れたんですか？」

「あつすいません。今思い出しました。君さんでしたね」

「はーいそつです！」

エプロンは常に持ち歩いている。常備しているエプロンをつけて、僕は何気ない顔で調理部員に成りました。

調理部と僕（後書き）

先輩の大好物は焼きプリン。

しかし…！隣を見れば、カスタードプリンの材料じゃないかっ！？ 目を盗んで、焼プリンを作れるのか！？

先生が僕にプリンの材料を渡し終わると、先生は僕と調理部員のほうを向いて話を始めた。

「では、黒板に書かれている作り方を元にプリンを作つてください。先生は職員室に戻りますので、最後に調理室を出る人は千錠せんじょうをして職員室に鍵を返しに来て下さい」

「はーい！」

調理部の部長だらう女の子が返事をすると、先生は職員室に行つてしまつた。

「うーん。話がうまく進んでいくなあ……」

どうやつて先生の目を盗んでプリンを作らうかと考えていたところ、先生はちょうどいいタイミングで職員室に行くという。しかも、話を聞いた限りではもう戻つて来ることもない。それに、調理部員の皆さんは僕に気がついて気がつかない振り。ようは気になつてはいるが声を掛けられない、そんな状態だ。

何だか話がうまく進みすぎている。少々嫌な予感もしたが、僕は気にすることなく焼きプリン作りを開始した。

「材料は揃つたから道具を取ってきてプリンを作るか……」

『力力力力力カツ』つと、卵を混ぜながら次の作業に移つていく。僕の手際はそれはもう素晴らしいに違ひない。今まで声を掛けてこなかつた調理部員の人人が話しかけてきた。

「あつあのお……」

「ん？ なに？」

「黒板に書いてある作り方を見ても、うまく出来ないんですけど……」

「えつ？ ああカラメルソース？ あれはねえ焦げないようにする為には、中火でいっきに混ぜてしまつた方がいいんだよ」

「そ、うなんですか？ ありがとうございます！ 試してみます！」

一人にアドバイスをおくつて緊張がようやく解けてきたんだろう。話しかけてきた人以外の調理部員の人たちが話しかけてきた。その中には調理部の部長だらうと思つ人もいた。

「プリン作るのうまいんですね！」

「うんまあそ、うだね。僕には食べさせてあげたい人がいるからね。想う気持ちつてすごいんだよ、おかげでプリンもそれ以外もすぐにうまく作れるようになつたし」

「想う気持ちですか？」

「そう！ 想う気持ち！ 今作つているプリンだつて先輩をモノで釣るため……いや、あげようと思つて作つているわけだしね！」

「好きなんですか……その先輩のこと?」

「うん好き好き、大好きだよ！　なんたって先輩は可愛いしね！
それに……僕は先輩にはとてもお世話になつたしね……」

僕は先輩が好き嫌いで言つたら、といつ質問だと思つて好きだと答えたのだが、なぜか調理部員の人たちは、『キヤー・キヤー』と言つて、話を最後まで聞いていなかつた。だから僕が小さい声で言つた言葉は、調理部員の人たちには聞こえていなかつた。

調理部へ饅頭へ（後書き）

メモ：調理部は今年出来たばかりの部活で、部長は一年、部員も一年で構成された部活動です。

一年生の君きみは声が掛けにくかったんでしょ？ね。

さて プリン完成までもうわざかだね。今までしていた会話を止めて、終わりに近づいたプリン作りに意識を集中することにした。

調理部員の人たちと会話をしながらも、手を休めることなく動かし続けていた僕はプリンを焼くだけになっていた。普通のプリンも焼プリンも焼くのだが、僕が作る焼プリンはちょっと違う。普通の焼プリンよりもわざと全体を焦がしているのだ。

時間が無いときは市販のものと同じように焼き立てで焦げ目をつけるが、時間があるときは僕が考え出した焼き方で、オーブンで焦げ目をつける。オーブンで焦げ目をつけたことで、市販のものには無い美味しさがあるので。

容器にプリンの液を流し入れ、オーブンに入れて時間をセット。ようやく焼き始める。

（焼プリンは焼き終わるまでに時間がかかることが唯一の問題なんだけどね……あつー？ 焼き終わるころって先輩居ないかもしけないじゃん！？）

「しまったあ！？ プリンを作ることで頭がいっぱいいで、先輩を捜しているってことをすっかり忘れてたあー！ しかも、焼き上がる時間をまったく考えていなかつたしー！」

「ー？ えつぜうしたんですかー？」

「あついやこひちの話」「話」

（しかしどうしたものか？ これ以上プリン作りに時間を割けないぞ……よし…）

「ねえ君たち、僕が今オープンの中に入れていくプリンなんだけど、時間がきたらタイマーが鳴るから、そうしたらここに居る人たちで分けて食べててくれないかな？」

「……いいんですか？」

「いいのいいのー。僕はこれから忙しいからここには戻ってこれないと思うんだ。だったら、ここに居る人たちで食べてもらえたほうがいいと思ってね」

「分かりました！ ジャあいいただきます！」

「うん。礼儀正しくていいね」

僕はそう言つと、嵌めていたエプロンを脱いで制服のポケットに入れる。そして廊下に飛び出して走り出した。脇道にそれちゃつたけど、本題の先輩探しを再開した。

調理部と僕 さん（後書き）

職員室に鍵を返しに来るのが遅いため先生が心配して調理部を見に来たところ、調理部員の人たちが君きみの作ったプリンを囲んでおり、先生は君が作ったプリンを食べて感動したそうな。

その後しばらく、指名手配犯のように掲示板に『君きみを捜しています』という張り紙がされていたそうです。

田中元和と先輩（前書き）

部屋を飛び出した先輩のお話

特に理由はなかつたが、私は思わず逃げ出した。

私の後輩である君は少々思い込みが激しいところがある。今回の出来事は誰かに唆されてやつたんだろうと信じて疑わない。

あの子は優しいのだが、その優しさが変な方向に働いたために話の食い違いが起こってしまった。唆されではないと説明しようにも、まず話を聞いて貰えなかつたから今回はさうに手に終えない。

「なんと言つたら納得してくれるのかな?」

私はそう咳きながら3年生の廊下を歩く。廊下に備え付けてある時計で時間を確認すれば、4時35分。もうすぐ5時になる。

「もうそんな時間なのかー」

私はまた独り言を言いながら廊下を歩いていく。特に理由もなく飛び出して来てしまつたが、これが良かつたのかもしれない。私は何か良い言い訳が思いつくかもしれないし、君が考えを改めてくれるかもしねれない。

(君には絶対に……昨日読んでいたマンガに描写されていたことを真似したら、同じ様な事が起るかななんて理由で試したなんて事を悟られないようにしないと……)

昨日読んでいたマンガ。月刊ピエロは、主に少女マンガしか載っていない。しかも、高校生の恋愛モノが多いため、一部読者からは高

い支持を得ている。そんな月刊ピトロのあるひとつの中のシーンがビックリしてしまって、試してしまったのだ。

そんな事は口が裂けても、君には言えなかつた。

しばらく歩いていると私の教室に来たが誰もいない。いつもならこんな時間でも、結構な人数が残っているはずなんだけど……

「……おかしいなあ。今日の君といい、今日のみんなの態度といい、私に内緒で何かやつてるのかな？」

君いわく、私の勘は良く当たるらしい。確かに、埋蔵金を見つけたり温泉を見つけたりとしたが、特におかしなことだとは思わない。だって、私の家族は私よりももつとすごいんだから。

そして、私はくるつと振り返りもと来た道を戻り始めた。なぜか戻らないといけない気がしたけれど、私にはよく分からぬ感覚だった。戻り始めてしばらくして、私は空き教室の一つに入った。

空き教室には私のクラスの人たちが全員集合していた。

月刊ピエロと先輩（後書き）

メモ：月刊ピエロは毎月20日発売の、大人気雑誌。先輩も数年前からのかなりの愛読者の様子。

はつからり言って、解説をしてくる僕のお話

僕は調理室を勢いよく飛び出してきたはいいけれど、ビルに向かえばいいのかまったく見当がつかなかつた。

（それもそうだ、先輩の居場所が分かるなんてそんな嬉しすぎるけどがあつていいわけが無い。いや、あつて欲しいなあ……）

（そうだなあ……とりあえず猫は高いところに逃げたがるし、上の階に行つてみるか。三年生の教室も上の階にあるから、何か情報を手に入れられるかもしれない！）

上の階に上がることに決めて、僕は廊下を歩き出した。今いる場所は2階。僕たち一年生の教室があるのも2階だから僕は今、一年生の教室が並んでいる教室棟を歩いていることになる。

話は変わるが、僕らが通つている高校は下校義務があり、午後19時を過ぎなければ下校をしてはいけない決まりになつていて。早退などの仕方のない理由があれば帰れるのだが、少しでも元気ならば下校時刻が来るまで高校から離れられない。

こんな義務が無くても高校生は高校に残つている人が多いのであまり関係ない。特に僕は先輩と一緒にいることができる時間が長くなるため、この決まりを作つた人物を表彰したいとも考えていた。そんなこんなで、部活が無い生徒は教室に残つてゐるのが主だつた。

しばらく歩いていたが、不意に声が聞こえてきた。無視しても良かつたんだが、声が聞こえてくればそちらの方を振り向きたくなってしまう。ましてやそれが、野太い声の悲鳴であつたとしても……

「どうしたの？」

僕は廊下側の窓を開け、悲鳴の上がつた教室を覗き込んだ。覗き込んだはいいが、どうして悲鳴が上がつたのか理由が分からず、小首を傾げるだけになつた。

教室の中は他の教室とも一切変わらず、きちんと机は並べられているし、席替えをしている最中というだけでおかしなことはない。おかしな事と言えば、このクラスに集められている人だけか……

鈴木5号と僕（後書き）

校則第一条、生徒午後19時まで下校を禁ず。校則違反は空氣椅子で勉学に取り組むべし！

校則第一条を破れば、上のとおりになります。朝から晩まで空氣椅子。出来なかつたら、正座に変更して授業を受けれます。

まあ、あるクラスは進んで空氣椅子をしていますが……

はつからり言つて、解説をしてくる僕のお話

「なにがあつた鈴木5号?」

僕がそう言った瞬間、教室にいた生徒は一人残らず僕の方を振り返つた。

（怖い怖すぎる！ 教室にいる全員が一度に振り返ると、ここまで怖いとは知らなかつた！？ 僕は鈴木5号を呼んだつもりだつたんだけど、まさか全員が振り返つてくれるとは……まあ無理はないけど……）

この高校のおかしな校則その二が、氏名統一性だった。

この決まりを分かりやすく言つと、全国で一番多い氏名のベスト6位は、同じ氏名の者と同じ教室になる。例えば僕が今覗き込んでいる教室は一年鈴木組。鈴木さんだけが集まつてできたクラスだ。

佐藤鈴木高橋田中渡辺伊藤。上から順に多い氏名なのが、一つの学年に普通のクラスとは別に、この6つの氏名統一性のクラスが存在している。

まあ別にいくら集められたところで、一つの教室に同じ個性の者が集まるとは無い。が、この一年鈴木組はそうはいかなかつた。

二年鈴木組総勢40名に対し、普通の一般人は一名だつた。鈴木5号もとい鈴木 鈴音。僕の友達の鈴音は例外的に普通な生徒だつたが、残りの39名は皆、ボディビルダー志望のムキムキマッチョな

人種だつた。

ビクツつとなりながらも、何とか平常心でいられた僕はまだ良い方だろう。風の噂で聞いた話しどでは、女子生徒が野暮用で二年鈴木組を訊ねて声をかけたところ、一度に振り返られてその場にいた数名の生徒も含めて心臓発作で救急車と緊急医療器具のお世話になつたそうだ。

この話は先輩に聞いたので、風の噂というよりはもはや真実なんだろう。しかし僕も実際に体験して分かつたが、こんなに恐ろしいものだつたとは……

鈴木5号と僕 二つ（後書き）

校則第一条、佐藤鈴木高橋田中渡辺伊藤。これらの性の者を集め学ばせるべし。反対意見は却下とす。

普通ならば同じ個性の者はクラスに数名つて所なんでしょうが、なにを間違つたのでしょうかね、同じ個性のものが揃つてしましました。眞面目で勉強熱心な彼らなんですが、溢れんばかりの筋肉が印象を悪くしてしまい、筋肉の巣窟と呼ばれており、命知らずの勇者が良く感染して戻ってきます。

他人事ならば、あながち間違つていませんね。

鈴木 5月10日 僕の話 (前書き)

鈴音と僕の話

「すいません……鈴音を呼んで貰えますか？」

僕は窓際の一一番近くにいた鈴木マッシュルに声をかけた。

「ふむ……君はなかなかいいものを持っているね。その上腕二頭筋なんて、少し鍛えればすぐに答えてくれるし、かなりのものになる。どうだい？ 今から軽くベンチプレスでもしないかね？」

「鈴音
つ！…」

「その声は俺のマイ・スイート・ハーツ！？ いじだつ！ ここの筋肉の下だ助けてくれつ！…」

僕の呼びかけに、すぐに返事が帰ってきた。どうやら教室にある筋肉の塊の下には、僕の友達が生き埋めにされているらしい。すぐにも助けてやりたいのだが、先輩が生き埋めにされている訳でもないから、火事場の馬鹿力は発動しそうにない。

「すまないが自力で来てくれ！ 少なくとも僕はそこに行くまでに、上腕二頭筋を鍛えたくら」ではどうにもならない！」

「見捨てて逃げようとしなかつただけ在り難い。お前がそこにいる限り、もう死を覚悟する事もないな！」

やつぱり鈴音は、『つあおおおつ…』つと、雄たけびを上げながら肉の塊を持ち上げて見せた。

「 「 「 おおっ 「 「 「

僕も含めて、鈴木マッスルの皆さんから驚きと賞賛の声が上がる。

先輩が僕にとつてそうであるように、鈴音の火事場の馬鹿力の発動の条件は、どうやら僕らしい。その事に気がつかれたのも、つい最近のことなのだが。

鈴音は、筋肉の塊を床にポイッと投げ捨てる、僕のほうに歩み寄ってきた。

言い忘れたかも知れないが、鈴音は女の子だ。細腕で二の腕ふにふにの可愛らしい女の子だが、その細腕のどこから発揮しているのだれうと思わせるくらいの、力持ちだ。

今筋肉の塊も、数百キロはあるだろうが、持ち上げて見せた。賞賛の声が上がるのも無理はない。

ちなみに彼女、時期表番長の有力株だ。現表番長からの信頼と期待が高いと聞いている。

「 俺のハニー。俺にどんな用だったのかな?」

「 あついや、鈴木マッスルの悲鳴が聞こえてきたからね、ちょっと覗いてみたんだ」

「 そり.....」

鈴音があきらかにガツカリした理由が分からず、僕は首を傾げるだけだった。

鈴木さちと僕 セン（後書き）

鈴音。恋する乙女です。一年鈴木組では唯一の女の子。

ちなみに気が付いている人もいるかも知れませんが、この物語では名前は出ません。みんな一人称・霧園氣・肩書きなどが名前のようになっています。（名前を付けることにしました）

表番長と二つ単語が出てきましたが、先の話で出てきます！

鈴木5号と僕 しい（前書き）

鈴音と僕の話

「あつそだ先輩を見ていなーい？ 今搜していんだけど、ビリビリ見当たらなくつて！」

「ゆるほに先輩……？」

鈴音の片眉がピクツつと上がり、嫌そうな顔をしたが僕は気がつかない。気が付かないまま、僕は喋り続けた。

「そー先輩！ 部活をしていたら、飛び出していちゃつたんだ。その前にいつもなら先輩がしないような行動を取つていたから、誰かが唆したか誑かしたに違いない！ 先輩はその辺に疎いからね」

「へーそーなんだ……ところでいなくなっちゃつた先輩と、押しつぶされていた俺、どっちが大切？」

「？？？ いきなりなにを聞いてくるの？ どちらが大切かと言えば、先輩に決まつペ つ！？」

先輩と言つた瞬間に僕はデコポンを貰い、廊下をバウンド。そして、クルクルと回転しながら壁にぶつかるまで、デコポンの勢いは止まらなかつた。

「ふんついい氣味だ！ 自分が何を言つたのか深く考えてからまた俺に会いに来たならば、話くらいしてやつても……あれ？ 君つどうした！？」

壁にぶつかったままの姿勢でまったく動かなくなってしまった僕のところへ、鈴音が急いで掛けよってきた。

「あひあひ……」

「氣絶するほんの少し前、僕は少々恥ずかしい言葉を口にしながら氣絶してしまった。

「氣がつくと保健室。隣には鈴音が腰掛けていた。

彼女は疲れたのか、イスに座つていながら眠つていてる。起きている姿も眠つている姿も可愛いの……なんてことは言えない。でも、

「先輩が横にいてくれたなら……はづくうーー？」

鈴音は眠つていたはずなのに、いきなり僕のあごに掌底。眠つていてはすだよね！？ と、思いながらまたまた氣絶とこいつの深い眠りについてしまった。

「起きたら家という展開は良くあるのだろうか？ 起きたら本当に家だつた。時間と日付を確認。良かつたまだ日付は変わっていない。

「今日一日何をしていたんだろう？ まったく思い出せない。何か重要なことがあったような気がするけど、朝玄関を出た瞬間までもしか思い出せないぞ」

「良こじことなのが悪いことなのか、僕の今日一日分の記憶が抜け落ち

ていた。

鈴木 5号と僕 しい（後書き）

君の記憶が一部なくなつた事により、先輩と僕の関係はいつせりつになりました。

君が家に帰るまでが分かりました。ですが先輩は？

表番長と先輩（前書き）

表番長と先輩の話

空き教室には私のクラスの人たちが私を抜かし、全員集合していた。放課後なのだから、席を自由に立っていてもいいし歩き回っていても誰も咎める者はいない。しかし私のクラスの人たちは全員椅子に座っていた。

正確に言うならば、自分の椅子に座っているプラス、椅子の上で正座をしていた。

「……なにしているの？」

「しつ……静かにして！」

私は一番近くにいたクラスメイトに声をかけたが、人差し指を口元に持つて行き、静かにというゼスチャーで制されてしまった。

驚いていたのも一瞬で、すぐに頭を回転させなにをしているのか答えを導き出そうとした。

（何かの遊び？ でもみんな神妙な顔つきで正座しているし。みんなで宗教？ 椅子の上に正座をする宗教なんて聞いた事がない……）

そんなことを考えたいたところで、答えのほうから私に近づいてきた。

「おったんほほめちやんじやないか？ キミは教室に残つていなかつたから巻き添えで怒られるのを免れたよつだね。いや、実にタイミングがいいな！」

大きな声ではきはきと。老若男女、本当に聞き取りやすい声というのは、こういう声なのだろうと思わせる声で私にそう話しかけてきた声には、聞き覚えがあつた。

私があけた扉から私に続くように入ってきた彼女は、全身から自信が漲つているのが見て分かる。自信の塊のような彼女は、私の通う高校なら いや、こいら辺の地域に住んでいてその名を知らないな いほうがおかしいとも言える。

表番長。それが彼女を自信の塊と押し上げたあだ名であり、道中じちゆう 蛇み 誇こ、それが彼女の名前であった。

「えつみこひやん？ じつじつこじつ」というか、怒られるつて何の事？」

怒ると言つた彼女の言葉が理解する事が出来ず、かつ彼女がこの場所にいるという事が私をさらに混乱させた。

表番長と先輩（後書き）

メモ：表番長は代々最強という証であり、表番長になり後継者が現れると引き継がれていく。性別や年齢は関係なく、高校を卒業しても後継者が現れない場合は継続して表番長と呼ばれる。

現表番長は歴代最強と呼ばれており、鈴木5号を後継者として熱心に教育中。

表番長と先輩 二つ（前書き）

表番長と先輩の話

「あついや、怒ると言つてもそんな大した理由じゃない。今月の我が高の生活目標が掃除の徹底という事はキミも知つてゐるだろ？　その事の関係する事なんだけど、キミを除くこのクラスの生徒は白昼堂々とサボつてね」

「えつ！？」

私は掃除時間、なぜか校長先生の部屋を掃除する事になつてゐるのクラスのみんながどのように掃除をしているかなんて知らなかつた。というか、全員でサボるという発想はまったく出てこない。

しかし私はここで、何か理由のあつての事ではないのかと思つたが、すでに事情聴衆を済ませているらしい彼女から違う違うと、首を振つて私の考えを否定された。

では何かと聞いたところ、集団心理が働いたのだと聞かされ私は納得した。

さて掃除の時間になつた、掃除に行こう。でも周りの奴らが行かないからまだいいだろ？　そんな集団心理が働き、ずるずると掃除に行かなくなつたそうな。

一日一日ならまだ分かる。しかし、もう一週間も連續で連續でサボつていればどこからかお呼びがかかるのもわけなかつた。

「たんぽぽちゃんとは話がしたいし、良かつたら今日は一緒に帰りたいところなんだけどね……残念ながらここいつらの説教が残つてい

てね。また今度一緒に喫茶店にでも行こうじゃないか！」

強引だけど決して相手が嫌がるような強要はさせない。それこそが彼女の魅力であった。

「うん分かった！　じゃあ今度ね！」

「そうだね。うんキミは改めていい子だ」

うんうんと頷きながら、彼女は私の頭を撫でてきた。

「わっ！　ちよ私は子供じゃないよー！」

「いや……可愛らしくていい　ね

ほほえましい空間が一瞬にして出来上がってしまった。正座をしているサボリ組みもほほえましく感じていたところ、お説教の開始の合図をじゅあねーの一言で下ろし、たんぽぽは帰ってしまった。

「や……て、裏番長が掲げた今月の目標を堂々とサボってくれたお前たちはどんな説教が欲しい？　お前らだけ校則の強化……は、ぬるいな」

「ではこれなんてどうだろ？　50キロマラソン。優勝者には10万円の優勝金。参加費は各自負担として手続きをしておこう。なに、5万メートル走れば済む話だ。簡単でシンプルだろ？」

「サボつたりは考えるなよ？　お前たちが一番私のあだ名の意味を

理解していなかったら？ 同じクラスだからな」

たんぽぽの知らないところで、ムンクの叫びが出来上がりっていた。
しかし数は38と少しづか多いが。

表番長と先輩 二つ（後書き）

表番長もとい、蛇誇の日課は肅正で、よく不良どもの首根っこを捕まえては引きずり回しています。

ところで鈴音が言っていたゆるほに先輩とは、ゆるゆるほにほにな先輩から来ている。誰とでも仲良しなたんぽぼは、近寄りがたいオーラを出している蛇誇とも仲良しで大親友です。

表番長が言つた裏番長は、いつか出てくると思います。それと先輩はしばらく校内をうろついた後、家に帰ります。

肉まんと僕（前書き）

肉まんと先輩と僕の話

「……寒い」

制服の上からコートを羽織りマフラーを何十にも巻いて家を出た僕は、あまつに寒さに思わず思考が漏れ出していた。

別に誰も聞いているわけではないのだが、無性に恥ずかしくなった僕は顔を赤くしながらコンビニに急いだ。

「肉まん」「つー」

「はー」

「ハンバーグ」いた僕は真っ先にレジに向かい、肉まんを頼んだ。

寒くなると布団から出たくなくなってしまう為、ご飯を食べないまま家を出していくのが、ついに登校してしまつ。

「どうにかして早起きできないかなあ」

「、無理なんだナビ。ここは葉っぱではない。

「寒い寒い熱い熱い」

コンビニから出て寒いと言つたり、肉まんを食べて熱いと言つたり、忙しいと言つたらありやしない。

でも今朝は 遅刻ぎりぎりで登校して良かつたと思つた。

「ちいこだよー」

もたもたと、先輩が曲がり角から走つて出てきたからだ。

「あつ」

口には食パン一斤を咥えた先輩は、曲がり角で盛大にこけたと思つたら、咥えていた一斤を道に落とし、こころうと転がつて行つた一斤はどうとう用水路の中に落ちてしまつた。

「せつ先輩大丈夫ですか？」

慌てて駆けつけた僕は倒れた先輩を起こしながら、怪我をしていいか素早く確認したが表面上の怪我は無いみたいだつた。

「だつだいじょうブイ！」

指を一本突き出した先輩の体を張つたギャグなのかもしれない。

（こじつこれは……笑つた方がいいのか笑わずに冷静に怪我がない事を聞くべきか……）

「あー私のパンがない！？ ビーにつ」

（一斤とは呼ばずパンと呼ぶ。これは一斤と言つたら死亡フラグな

（んだらうつな）

「先輩のパンなら用水路に落ちてしましましたよ？ もし良かつたら、僕の肉まん食べますか？」

先輩じゃなくともあまりにも可哀想なので書いていただらうセリフなのだが

「いいの？」

ぱつぱつお田田をきらきらさせで、僕に上田遣いで尋ねてきた。うつ何だこれは、反則じやないのか！？

「差し上げよ」

「わーい」

肉まんを渡したら、さっそくほくほくさせて食べる先輩。見ていて和み……いや芸術ですね！

「先輩、雪が積もっているんですから、走らないで下をこ。」けますよ？

「私ならだいじょうブイ！」

（流行つているのかな？ もしかして僕だけ時代遅れ？）

そう言って軽く飛び跳ねた先輩は、こけた。

僕の方に背中から倒れこんで来るようになけた先輩を優しくキヤッ
チ。その反動で先輩の口から肉まんが飛んでしまった。

飛んで飛んで……僕の口に収まつた。

なんといつミラクル。動画を取つてテレビに送りたい位の出来事だ
つたのだが、僕は肝心な事を忘れていた。その事にいち早く気が付
いたのは先輩で。

「……ツー？」

「どうしました先輩っ！ 頬が真っ赤ですよー」

「かつか……」

「か？」

「なんでもないっー！」

僕の手を振りほどき、先輩は物凄い速さで学校に行つてしまつた。
一人ボツンと残された僕は、口から先輩が食べていた肉まんが落ち
ていく事にも気が付かず、呆然と立ち尽くした。

肉まんと僕（後書き）

いつもやく文章を書く事にも慣れてきたので、みなさんに恥ずかしくないような文章を見せる事ができるので、安心しています。

書いていて、先輩も僕も今までと雰囲気も性格も違つ！？ と、書いてしまつてから気が付きました。今までの雰囲気や性格は忘れていただき、これが本当の性格なんだと無理な話かもしれませんが思つてください。

人物紹介 01（前書き）

人物紹介です。

これからも人物は登場しますし、今登場している人物の新たな一面
が出てくるかもしれません。

そうなるたびに、人物紹介をして行こうかと思つています。

赤井 あかい 君 きみ

『誰に対しても気さくに話しかけられる、それが全くの他人でも動じる事はない。顔を赤くし動搖し困っている時こそ、君の傍にいるだろう』

元、君。二年生。語り部であり、主人公。かな？

先輩の為ならば、例え火の中水の中。先輩がいると火事場の馬鹿力を使用可能。先輩の為ならば人間の限界を超えて、宇宙まで飛んで行きそうです。

日向 ひなた 蒲公英 たんぽぽ

『日が当たる所にたんぽぽが咲いている。いつも笑顔を振りまき、その笑顔で慕われる。たんぽぽの周りにはいつも日がさしている』

元、先輩。三年生。語り部であり、主人公。かな？

ゆるゆるふわふわとしている先輩。誰に対しても優しい為、一・二・三年生から、女神として崇められている事も。勘が鋭く、温泉などを掘り当てた事がある。家族はもっとすごいらしい。蒲公英という自分の漢字が嫌いで、名前を書く時はひらがな。

皆 みな 太陽 たいよう

『つねに太陽のように元気に明るく輝いている。困難、試練、そんな小さなものは太陽の前では意味はない』

元、熱血君。一年生。君と同じクラス。

誰からも愛されるクラスのムードメーカー。購買部にたんぽぽがいる事を君に隠そうとして、出来なかつた事を後悔している。理由は手作り弁当を分けてもらつていたから。

道中 蛇誇

『歩む道はどんなに険しかろうとも阻まれよつと、蛇の「」とくしぶとく誇らしげに、我が道を行く。蛇は災いの元なのか、否、安心を与える事も神様にだつてなれる』

元、表番長。二年生。瀟正。

地元では名前を知らないものはいない、お掃除屋さん。（不良の）たんぽぽの事をえらく気に入っている。そのわけは……？

鈴木 鈴音

『耳を澄ますと聞こえてくる、安心できる毎日の始まり終わりを告げるその音が。いつも耳にするその音だからこそ、無くてはならない』

元、鈴木5号。一年生。鈴木組。

い

力の強い女の子。どうしてこんなに力が強いのかは、本人にも分かっていない。ただ、親の所為ではないのかと疑っている。

人物紹介 01（後書き）

今まで書いてきた話を手直ししていくので、よろしかつたら見直してみて下さい。

再購買部戦争と先輩（前編）

またまた購買部戦争と先輩の話

(もつ すぐだ)

腕を組み田を開じる。そして、体内時計で時間を測る。

(もつすぐ……もつすぐ時間になる)

額にうつすら汗がにじんできた。そして時間を知らせる鐘が辺りいつたに鳴り響く。

『きーん』ーんかーん』ーん』

そう、この鐘こそが始まりの合図だ。

「おーい君ー 今日も行くんだつ、購買部」

僕にそう声をかけてきたのは太陽、購買部戦争の常連でつわものと名高い一人だ。

(だが、まだだ。まだ時間ではない)

「おーい！ 聞いてるかー？」

（聞こえていいよ。少し静かにしてくれないかなあ……今集中しているんだから）

体内時計で時間を測り、ベストな時間が来るのを待つ。残り3秒、2秒、1秒。そして、ようやくその時が来た。

「うむ、それでは出陣じゃ！」

「はっ！ かしこまりました！」

勢いよく立ち上がった僕は、立ち上がった拍子に今まで座っていた椅子が飛んでいく事を気にも留めない。

今の僕は、戦国武将の用に気持ちは高ぶっている。というか、僕と太陽は思わず場違いなセリフ まあ間違ってはいないが、口にしていた。

戦場もとい購買部に来た僕は、エプロンを付けながら売り子を始めよつとする先輩を見つけると、体内時計の精度が落ちていない事を実感する。

先輩が購買部の売り子のバイトをしている事を知つてから、僕は通い詰めるかのようにほとんど購買部に顔を出していた。そして、より効率を求める為に聞き込みを怠らなかつた。

先輩がバイトをしている曜日と入る時間の聞き込み。主にどのよつな商品が売れているのか、どのタイミングでお金渡すと先輩に受

け取つてもりえるのか。

緻密に計算、聞き込みを重ねた僕には死角はなかつた。

と、思つていた僕だつたが、実は大きな見落としがあり、僕の頭を悩ませる事となつた。

『先輩に近づけるのつて、お金を渡すときだけじゃん!』

再購買部戦争と先輩（後書き）

また購買部戦争の話です。書いていて、君のキャラがわからないです。彼、どんなキャラなんでしょうか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8171x/>

先輩と僕

2011年12月20日13時50分発行